

第 48 号

# 会報

青山学院大学  
日本文学会

2014 年 3 月 19 日

(題字) 湯池 孝先生



# 馬込文士村

日本文学科教授 山下 喜代



ない。両親は長崎県出身で、そこらは子どもの頃を含めて、何度か訪れたことがある。むしろ馴染みがあるという点で、「出身地」は「長崎県」と書きたいところだ。しかし、長崎は、私が「生い育った土地」ではないということ、それもためらわれる。一瞬の戸惑いは、そのような事情によるものだ。

何かの調査などで、「出身地」を書かなければならない時、一瞬戸惑いを感じる。辞書によると「出身地」とは、「その人が生まれた土地。また、生い育った土地」のことである。そこで、生まれた土地である「山口県(下関市)」と書くことにしている。しかし、たまたま父の仕事の関係で下関に住んでいたにすぎず、生後一年ほどで東京に移り住んでいる。それ以来、下関には行ったことがない。当然、そこには、記憶も思い出も

それとともに、かつて暮らした東京の町、そこでの生活や出会った人々が懐かしく思い出された。

五歳から十五歳までの十年間、大田区馬込に住んでいた。あの「馬込文士村」である。「馬込文士村」は、大田区の馬込、中央、山王の一带を指し、明治末期から昭和の戦前まで多くの芸術家や文士たちが移り住んで盛んな交流が行われたことから、後にそのように呼ばれるようになった。馬込文士村の住人には、尾崎士郎、宇野千代、萩原朔太郎、川端康成、北原白秋、石坂洋次郎など、多くの文士がいた。戦後もその地に住み続けた作家もいる。

私が「馬込文士村」のことを知ったのは、大学の国文科に入学してからだった。その時は、もう馬込には住んでいなかったが、馬込にいた頃、地元中学校に尾崎士郎の孫がいるという話を聞いたことを思い出した。また、母が買い物から帰宅して、「商店街で三島由紀夫を見かけた」と話していたこともあった。「馬込文士村」のことを知った時「そういうことだったのか」と合点したのだった。卒業論文で取り上げた佐多稲子が、やはり馬込文士村の住人だったと

知った時は、遠い存在だったプロレタリア作家が、少し身近になったようだった。そして、自分自身が馬込の住人だった時に、「文士村」を知らなかったことが何かとも損をしたように感じられた。

それから、「いつか、あの町を再び訪れてみたい」という思いが実現したのは、二十年後だった。大森駅から母が三島由紀夫に遭遇した商店街を巡って馬込へと向かい、萩原朔太郎や川端康成が住んでいた「白田坂」を上った。あつたはずの道や家が見つからないなど、変化も大きかった。そして「馬込文士村」として眺める町は別の姿を現し、懐かしさとともに、新たな発見の多い再訪であった。

あれからまた二十年が過ぎた。今再び、あの町を訪ねたいと思っている。インターネットで調べてみると、「馬込文士村」情報が山のようにある。大田区では馬込文士村散策コースを設定して、文士の旧宅などに解説板も設置しているらしい。文士村資料展示室も設けている。今度の「里帰り」では、文士との出会いも楽しみだが、同級生の実家の豆腐屋さんも訪ねてみようと思う。

# 韓国古歌の序詞

日本文学科教授 矢嶋 泉



高麗時代初期の高僧均如の生涯を記した『均如伝』（赫連挺、一〇七五年。正式な書名は『大華嚴首座円通両重大師均如伝』）は、均如作の郷歌（漢詩に対して固有語の歌をいう）十一首が収載されていることである。伝自体は漢文で書かれているが、十一首は唱導を目的として作られたものであるため、当時の固有語で歌われており、記述様式も漢文ではなく固有語文で記されている。十一首は均如の自序とともに収載され

ていることから、均如自身の手稿がそのまま引用されたものと推測される。

字数に制約があるため、ここでは第一首「礼敬諸仏歌」冒頭二句のみを見ることにしよう。①原文、②金完鎮『郷歌解読法研究』（一九八〇年）によって当時の固有語で読み下された形〔a〕は後舌のア、「ㄷ」は唇を横に引いたウ、「ㄹ」は口を大きく開けたオ）、③同氏による現代韓国語訳の日本語訳（矢嶋訳）を左に示す。

- ① 心未 筆 留
  - 慕呂 白 乎 隱 仏 体 前 衣
  - ② maezumi-i pud-wro
  - kwri-salbon puthich alpha-i
  - ③ 心 の 筆 で
  - 慕ひまつる 仏(の)前に
- 韓国語も日本語も膠着語に属する言語ゆえ、語順はもちろん実字（太字）と付属語の関係までほぼ

一致することに改めて驚かされるが、その日本語訳を通じて、①が漢語には存在しない高麗固有語の要素（付属語や用言の活用語尾、敬讓語など）をも文字化しようとして試みたものであることが知られる。

さて、二句の訓み方は分かったが、何か腑に落ちないところがある。そう、「心の筆で慕ひまつる」が理解できないのである。伝の作者赫連挺の漢訳は「以心為筆畫空王」（日本語で訓読すれば「心を以ちて筆と為し空王を畫く」）で、これなら何とか理解できそうではある（全圭泰『論註 郷歌』（一九七六年）も「慕は畫の意」と説く）。しかし、「畫く」の意を表すのであれば、わざわざ字義を異にする「慕」を選択する必要はなかったのではないかと改めて問い直すとき、やはり釈然としないものがある。

これまで重視されてこなかったが、この問題を解く鍵は「慕」「畫」が当時の固有語で同訓（kwri-da）になるという点にある。「心の筆で」からは「畫く（kwri-da）」の意で形成された文脈が、それと同訓の「慕ふ（kwri-da）」の意を介

して「仏の前に」に繋がってゆくのである。和歌の伝統技法でいえば、同音を介して下句を導く序詞に近似した技法といえよう。こうした同音による語義の重層・転換は、均如の郷歌が口承の歌謡世界と濃密な関係を維持していることを意味する。韓国古代歌謡の魅力の一つは、恐らくこういうところにあるのではないかというのが、現時点での私の考えである。

## 第48号 目次

巻頭随筆	二
研究余瀆	三
日本文学会春季大会	四
日文生随筆	五
日本文学科	
キャンパスの思い出	八
学生による小レポート	一二
二〇一三年度演習紹介	一五
日本文学特講A・B	二〇
二〇一三年度講義題目	二二
研究室だより	二四
編集後記	二四

## 日本文学会春季大会

講演・宮川葉子先生(淑徳大学国際コミュニケーション学部教授)

# 『源氏物語』が紡ぐ家系

さんじょうにし

おおぎまち

—三条西実隆から正親町町子へ—

報告 博士前期課程 中野 瑛介



去る六月二十二日(土)、青山学院大学日本文学会大会が開かれた。今回は講師に宮川葉子先生をお招きして講演を行っていただいた。

宮川先生は一九四七年生まれ。青山学院大学文学部日本文学科を卒業し、同大学院博士課程を満期退学されている。つまり、日本文学科生の大先輩に当たる方だ。青

山学院大学他の非常勤講師を経て、現在は淑徳大学の教授を務められている。

宮川先生の御専門は『源氏物語』の受容や、三条西家の古典学であり、今回の講演では、『松陰日記』と、その成立に関わる人々を通して浮かび上がってくる『源氏物語』の受容と、三条西家古典学の系譜についてお話ししていただいた。それは次のようなことであった。

『松陰日記』は、正親町町子(？)く(一七二四)によって記された。正親町町子は柳澤吉保(一六五八〜一七一四)の側室だった女性である。

吉保は、徳川五代将軍・綱吉に側用人として仕え、一代で異例の出世を成し遂げた人物であり、吉

保の栄華を記したのが『楽只堂年録』だ。公的な日記文書の『楽只堂年録』を婦女子にも親しみやすいように、町子が書き改めたものが『松陰日記』である。

『松陰日記』は『源氏物語』から強い影響を受けており、『源氏物語』本文の引用や引歌、草子地の表現、巻名の命名など、随所から『源氏物語』の影響をうかがうことができる。

なぜそれほどまで『松陰日記』は『源氏物語』を意識して書かれることになったのか。その理由は、著者の正親町町子の背景を知ること、推測することができるだろう。

正親町町子は、父、正親町公通と母、水無瀬氏信女を両親に持つ。しかし、町子の出自に関しては、父が公通の父、実豊で、母は祇園の芸妓であり、また、町子自身も芸妓であった、という間違った形で伝えられ、それが定説化していた。その説に異を唱えたのが宮川先生である。「私がやってきた研究の中で、最も私が誇らしげに言えるのは、正親町町子が一体誰を本当の父親とし、本当の母親として生まれてきたのかということ

明らかにできた部分ではないかと思っています」と先生。

残念ながら紙幅の都合で町子自身の混乱の経緯は省略しなければならぬが、町子は正親町家および水無瀬家の正當な子孫であった。正親町家および水無瀬家は共に、室町後期の歌人・古典学者である三条西実隆が築いた古典学を受け継ぐ血筋であった。また、町子と吉保は公通を通して、靈元院の和歌添削を受けていた。『源氏物語』は歌人必読の書であった。『松陰日記』に見える『源氏物語』に関する知識は、町子のそうした背景から窺えるだろう。

以上、宮川先生の講演を、町子に関する事項を中心にとまとめたが、記載できなかったことも多い。今回の講演は、中古から近世までの三時代に渡り、更に歌と散文という区分を超えた内容を、わずか一時間でお話いただく、という非常に密度の濃いものだった。それを短い記事にすべてまとめるというのは記者には荷が重すぎる。宮川先生の研究に興味を持った読者は、是非先生の著作に目を通していただきたい。

# 日女生随筆

## 介護等体験を終えて

3B 小川 剛央

私は中学校・高等学校における国語科の教職課程の一環として、二〇一三年度の前期において介護等体験を行いました。介護等体験とは、小学校や中学校の教員資格を取得するにあたって必要とされる活動の一つです。この活動では文部科学省が定めた期間、実際に特別支援学校や社会福祉施設で児童生徒や介護が必要な方と交流します。私は、東京都の特別支援学校で二日間体験をしました。小学校一年生の学級で体験を行いました。最初の頃はなかなか児童とコミュニケーションを取ることができず、とても大変でした。それでも、児童一人ひとりと交流する中でお互いの理解が深まり、一緒に学習することができるようになりました。二日間の授業では、特別支援学校で催される運動会の練

習をしました。徒競走や障害物競走などの練習で、児童が精一杯走っていた姿が印象に残っています。私の学級では、朝の会で児童一人ひとりの一日の目標を決めていました。「障害物競走に取り組むこと」や「一生懸命走ること」などが目標でした。達成することは難しくな目標ですが、生徒がそれまでできなかったことができるとなっていく姿を見てとてもうれしく感じました。二日間という短い期間でしたが、体験の最終日に児童が「ありがとうございました」と言ってくれたことも嬉しく、充実した活動ができたと思っています。

このように、介護等体験は短い期間ですが実りある活動でした。将来、教員となって役立てることが出来るものばかりだったと思います。一人ひとりの児童・生徒のことをよく理解したうえでコミュニケーションをとることや、生徒の成長を見守り支援していくことの大切さを実感しました。



## 「教育実習体験記」

4B 長野 沙希

六月上旬。母校である高校で生徒たちが一番楽しみにしているイベントの文化祭・体育祭が終わってから、私の教育実習は始まりました。

授業は一年生と二年生のクラスずつ、私にとっては思い入れの強い古典を担当しました。教壇実習は計十四時間ですが、異なる学年を担当することで、生徒の実態に合わせて授業を組んでいくことを学び、その中で自分の授業スタイルを見つけていきました。

それでも、最初は不安で顔を真っ青にしながら教壇に立ちました。だからだと冷や汗をかいていましたし、指導教諭からは「笑顔で授業を」と真っ先に注意され、生徒からも「緊張しすぎ！大丈夫だって！」と助けてもらっていました。今思えば、失敗しないように頑張らなくてはと思うあまり、生徒の姿が見えていませんでした。学校は生徒が主役です。生徒と一緒に授業を組み立てていく意識を持ち、念入りに準備をしておきま

しょう。

そして、そんな授業以外の時間は生徒たちとたわいもない話をしていました。ふとした瞬間に、「どうやって勉強するの？」「進路が決まらなくて……」と相談されることも多々ありました。それまで無邪気に笑っていた生徒たちからの相談で、生徒の悩みを受け止める教師の責任を感じました。あの時の生徒たちの目は、忘れられません。

常にやるべきことが増えていくような感覚で、体力的にも精神的にも、今までで最も大変な三週間でした。授業準備は勿論、学級経営や部活動。予想以上に仕事は多くあります。生徒も、「先生」の一人として実習生を信頼しています。大学生気分ではいられません。しかし、実習は厳しい現実だけでなく、教師としての喜びを実感する場です。私は実習を通し、教師になりたいという気持ち、絶対に教師になるという気持ちになりました。先生方や実習生仲間、そして生徒に助けられたこの経験を糧に、これからも温かく生徒を導きながら見守る教師を目指し、努力し続けます。

## 就職活動体験記

4C 清水 紗蘭

「就活」という言葉を聞いたとき、何を思い浮かべますか？ メディアを見れば、「就職難」や「就職氷河期」という言葉が踊り、サークルやゼミの先輩からは「辛いよ」「苦しいよ」と言われ、あなたは就職に対して暗いイメージを抱いていることでしょうか。

選考に落ちれば自分を否定された気になりますし、自分は就職できないのではないかと不安になることも多々あります。しかし、私が本当に辛くて苦しかったのは、自分が何をしたいのか、どんな生き方をしたいのかがわからないことでした。

私は、三年生の十二月から就職活動を始めました。けれども「社会人として働く」ということが実感できずに、周りに置いていかれないように、ただ動いているだけでした。会社説明会やセミナーに参加するたびに「仕事のやりがい」や「自分の会社の素晴らしさ」を

伝えられ、よくわからないけれどもなんだか格好良いなと流されて選考に参加していました。けれども選考が進むにつれ、何かが違うと感じ、選考を辞退することもありました。

社会にはあなたが思っている以上に多くの会社があり、その会社の数だけ「働き方」があり「働き方の理念」があります。本格的に就職活動を始める前に、どのように社会と関わっていきたいのかを真剣に考えてみてください。

特に女性には、男性よりも多くの働き方が存在します。総合職、一般職の他にも最近ではエリア総合職・地方職と呼ばれるような準総合職も出てきました。会社ごとに職種と呼ばれる様々な方で、興味のある会社の雇用形態はしっかりと調べ、自分に適した働き方を探してください。

就活中は色々悩み、どうしたら良いのかわからないことも多く出てきます。そんな時は誰かに相談することをお勧めします。親や友人、先輩、あなたの周りには沢山の人がいます。もちろん最終的に決断するのはあなた自身でなければなりません、誰かに相談す

ることで自分の現状や悩みがまつまり、答えが見つかるというのはよくあることです。特に大学のキャリアセンターの方は、就職相談のプロです。何かわからないことや不安なこと、迷っていることがあったら、是非足を運んでみてください。

就活は苦しいことも多いですが、決してそれだけではありません。今まで知らなかった社会に触れ、多くの会社を知ることができ、自分を成長させるチャンスでもあります。はじめから暗いイメージを抱かずに、楽しみながら活動してみてください。

「就活を楽しむ」ことが、自分の納得する形で就活を終えるための第一歩だと思います。

## 大学院に進学して

博士前期課程1年

金城 ゆり

宮益坂を上り青山通りを突き進めば、城壁のような壁が見えてきます。都心にそびえ立ち荘厳な外

壁に囲まれた空間、というような印象を受けた青山学院ですが、昨年の四月、城壁の中へ初めて足を踏み入れました。

大学へは月曜から金曜まで通っており、一年生のうちに約二十単位を履修する人がほとんどだと思います。週に五つの授業に出ることになりますが、そう多くないよう感じるかもしれません。しかし、その労力と気力は当初の想像をはるかに超えるものでした。授業は院生による発表形式で行われ、一度の発表で二週間また多い時には三週間行います。いくつかの授業で発表の順番が重なってしまうと、同時に三つの発表を抱えるなんてこともあります。発表後の討議の場では様々な意見や問題点が出され、自分では気がつくことになかった新たな世界に出会えます。新たな発見や刺激が多い分だけ自分が無知であることを実感し、必死になる日々です。方法はこれで良いのか、作品の見方はこれで良いのか、研究を進めれば進めるほど様々な悩みを抱えるようになり、研究に対する態度を考え直しています。授業以外の時間はほとんど研究室に籠り、発表準備や研究を

しています。

ここまで読むと孤独に研究をしているように感じるかもしれないませんが、そんなことばかりではありません。行きづまると一緒に考えて下さり、アドバイスをして下さる先輩方がいます。そんな先輩方との休憩時間は気持ちのチャージとなっています。糖分を取りながら気持ちのリフレッシュや相談を聞いてもらうことで先輩もかつては自分と同じようなことで悩んでいたのだとわかり、大変励みになります。そしてさらに頑張ろうと思うことが出来ます。また、自分とは違う専門の方とお話をする機会があるのも青学大学院の良いところではないでしょうか。より深く考える、より広く見る、それを目指して勉強しています。

## 異郷の地にて

2C 黄ユティン

大学入試の面接で、「日本文学を学んで将来どのように活かしたいですか?」と教授から質問を

頂いた。しばらく考えて、「将来、私は日本と台湾の架け橋になって、日本の文学作品を翻訳して、台湾人に読んでもらいたいです」と緊張で震えが止まらなかった自分だったが、背筋を伸ばして答えた。すると、教授は何も言わずに、ただ微笑みながら頷いただけだった。面接の時を振り返ってみると、多分教授は自分の熱意に水を差したくないから、あえて何も言わなかったのだろう。

青学に入って、初めて受けた授業は『うつほ物語』だった。授業前に勉強意欲満々の私は教科書を開いて、予習しようとしたところ、あまりにも難しい内容で愕然とした。内容は平仮名と漢字で書かれたが、意味は全くわからなかった。更に辞書を開いて、単語と文法を全部引いてみたが、やはり理解出来なかった。古文の知識を持っていない私にとって、授業において、常に先生の板書を写しながら一生懸命電子辞書を引いていた。また、授業内容をこなすのも非常に大変だった。しかも、頑張った成果が全く実らず、授業に対する理解力がなかなか上がらないのだ。挫折感を味わった自分は焦り

に焦って、ついに抱えていた悩みを先生に相談した。そうしたら、「わからないのはあなただけじゃない。日本人だってわからない所はいっぱいあるよ!」と先生の一言で溜まったストレスと不安が拭い去られた。日本人でさえ完璧に理解出来るわけではないから、過剰に焦る必要がない。自分のペースで取り組めば、きっと少しずつ成長していけると思っ、今までのやり方を少し変えた。前は授業を受ける時、常にひたすら辞書を引くのに集中し過ぎて、反対に先生の話をじっくり考える余裕がなかったが、現在は辞書を調べることで気を散らさないように先生の話だけに集中するようにしている。すると、不思議なことで、思考が中断されな

いおかげで、勉強効率が前より上がった気がした。しかし、自分にとってどうしても克服出来ないことがある。それは発表することだ。私は人の前で話すのが苦手で、たとえ事前の準備を整えたとしても、いざ皆の前に立つと緊張のせい

で頭が真っ白になって言葉が出て来なくなる。もちろん、他にも不足なところが多数あるが、外国人だから仕方がないと思われたくない。外国人だからこそ、人一倍の努力を払わなければならないのだ。今後も他の学生の勉強姿勢を見習いつつ、自分の弱みを克服していきたい。いつか絶対日本人と肩を並べる程の日本語力を身に付けて、自分の夢を叶えたいと思う。



# 日本文学科とキャンパスの思い出

## 充電する向日葵

篠原 進

何事にも時があり  
天の下の出来事にはすべて  
定められた時がある。  
生まれる時、死ぬ時

植える時、植えたものを抜く時  
(コヘレトの言葉 三二・一、二)

この夏、わが家のエントランス  
に向日葵が植えられた。その数、  
一三本。改めて観察すると、黄色  
にはさまざまな色があり、成長に  
も差のあることが分かる。各々が  
人の背丈を超えるほど大きくなり、  
思い思いに花を咲かせる中、ひと  
きわ小さな一本があった。このま  
ま枯れてしまうのかと案じていた  
が、周囲の花が盛りを終えるころ  
急速に伸張し、他を圧倒するほど  
の大きさになった。幹も太く、鮮  
やかな花輪は他の一、五倍もあつ  
たのである。

そんな一瞬の物語も、記録的な  
暑さが平年並みに戻り、秋桜の咲  
き始める朝に終わった。その時、  
浮かんできたのが右の聖句だった。  
銀座の教文館で買った本の葉に刻  
まれた言葉は、一つのアナロジー  
としてさまざまな連想を誘うこと  
となる。

青山学院大学日本文学科は、  
一九六六年四月に誕生した。定員  
は八〇。スタッフは主任の田坂誠  
喜先生以下、六名（湯地孝、寺本  
直彦、新聞進一、寺園司、林巨樹）。  
斯界の権威が担保する安定感。そ  
の分だけ熱気を欠くという憾みも、  
武藤元昭、石塚晴通、安田尚道と  
いった三〇歳前後の先生方が加わ  
ることで払拭し、新築の八号館五  
階に移動した合同研究室は活況を  
呈していた。

時あたかも七〇年安保を控え  
た、政治の季節。騒然とした中に  
も、ふしぎな静寂と充電期特有の  
ときめきがそこにあった。東京銀  
行（現三菱東京UFJ）が四大卒

の女性を採用したことが話題とな  
る時代だったが就職に奔走するこ  
ともなく、九号館までしかなかつ  
たキャンパスには野草園や丘も残  
り、時間はゆっくりと流れていた。  
当時は弱小だった野球、バス  
ケット、バレー部も常勝軍団とな  
り、創設五〇年を控えた日本文学  
科は厚木、相模

原を経て、今再  
び一年生から大  
学院生まで同じ  
研究室に集うよ  
うになった。歳  
の違う友人から  
学ぶものが多い  
し、このメリッ  
トは測り知れな  
いものがある。

キャンパスは  
窮屈になったが、  
心の空間と静謐  
の時間をできる  
だけ広く長く持  
ち、「定められ  
た時」に思い切  
り充電し、誰よ  
りも大きな花を  
咲かせて欲しい  
と、黄葉しか

た銀杏並木に立ち尽くしながら思  
うのである。

「才能は一つあれば良い」  
(映画「タイピスト」)。



■現15号館（ガウチャー）の位置にあった旧礼拝堂

# 厚木キャンパスの

## 思い出

曲淵 祥子

もう二十年近く前のことになりましたが、私が大学一〜二年生の頃に通った厚木キャンパスについてまず思い出すのは、自然が豊かでなんと開放的な雰囲気だったことです。さいたま市（その頃はまだ浦和市）の自宅から電車に揺られて約二時間。埼京線のホームからは小さくしか見えない富士山が



■厚木キャンパス、C館付近

みるみる大きくなって、心象で十倍ほどになった頃に着く愛甲石田駅。かなちゅう（神奈川県中央交通）バスに乗り換えてさらに三十分。丘を登りきったところにあるキャンパスからは空が近くに見える気がしました。空気がよくて、のどかで、遠くには山並みが見えて。授業の合間に広々とした敷地を歩くのが気持ちよかったです。

細かいところでは、食堂の席とり合戦、芝生の上に寝転んで日光浴していた学生たち、青山キャンパスのものに比べると若々しかった蔦の緑、ふかふかのチャペルの椅子。少々つらかったこととしては、正門以外の入り口への行程が登山に等しいものだったこと、朝早起きして出席した一限の授業が眠くて眠くて仕方なかったことなど。…書いているうちに、いろいろ思い出してきました。

それから、サークルに関することについて。入学当初、華やかなテニス系サークルに気後れしていた私は、暖かな楽器の音色に誘われて音楽系のサークルに入りました。部室は他のサークルとの相部屋で、ちょうど窓から新人と思われる応援団員の初々しい練習を眺

めることができました。気のおけない仲間たちが授業の合間に入れ替わり立ち代わり、なんとはなしに集って過ごす部室という空間は、社会人になって振り返るととてもキラキラしたものに思えます。味はあるものの古くて黴臭かった青山の部室に比べると、厚木の部室は明るく風通しもよく居心地がよかったです。

真面目な話も少し。学ぶ楽しさを覚えたのも厚木キャンパスだったと思います。専攻した日本文学に関することだけでなく、一般教養（ばんきょう）で選択した「天文学」「哲学」「生物」「法学」「史学」などでも、ある特定のテーマを深く追求していく講義にドキドキするような興奮を覚えて夢中でノートをとった記憶があります。

就職活動はまだ少し先でしたが、将来のことを考えたこの頃です。バブルがはじけて就職氷河期という言葉が浸透し始めた時代でもあり、多くの学生が先行きに不安を感じていました。そんななか、「文学を学んだことって、社会でどう役に立つのかな」などと話していた私たちに、先生が「カナリア効果」の話をしてく

れたことが心に残っています。炭鉱などで発生した有毒ガスをいち早く察知して鳴いて知らせるカナリアのように、目には見えない社会の変化を先んじて感じとり、それを発信できる力を育んでいることが文学部の学生の強みではないか、そんな先生のメッセージであつたかと思えます。就職活動には苦労しましたが、社会人になってはや十数年、時折大学の頃に培ったものが生かされているかなと感じるときがあります。

通っていた当時は、「遠くて嫌だな」「周りには山以外なにもない」「早く三年生になって、憧れの青山キャンパスに行きたい」「交通費が本当に馬鹿にならない」などと愚痴ばかりこぼしていた気がしますが、思い返してみると厚木には愛おしい思い出が多く、大好きなキャンパスであつたことに気づきます。

（一九九六年度卒）

# 相模原キャンパスの

## 思い出

3B 齋藤 亮太

淵野辺の校門からは石畳の大道が真っ直ぐに伸びている。夏季には青々と繁る樹の梢葉に遮られて見えないが、本来ならば真正面に行ったところに長大な棟が確認できるはずだ。少し前まではそのB棟を境目にして理系教室と文系教室が分かれており、学生たちからは縦横に広がる外見も相まってベルリン棟と呼ばれていた。

B棟は相模原キャンパス最長の九階建てになっている。最上階の外壁はガラス張りで、そこからはちよつとした展望室のようにキャンパスの全体像を視野に収めることができる。もし相模原に行くことがあったら、是非ここに寄って欲しいと僕は思う。特に何かを見ようとしなくてもいい。ベルリン棟から人が出てきた。芝生が風にさざなみを立てた。チャペルのステンドグラスが日に煌めいた。何でもないことだけれども、ただ見取り図やキャンパス紹介を見るの



■相模原キャンパスのチャペル

とは違う、生きた相模原が俯瞰できる。

僕が展望室を訪れたのは春と冬の二回だった。二年間でたった二回だけである。勿論いつでも行くこと自体は出来た。けれども最上階は特別な理由もなしに向かうような場所ではなかったし、僕もふらつと立ち寄って、下に動き回る人々を眺めて楽しもうというようなひねくれではなかった。だから一回目の特別な理由とはこうだ。新学期の慌しさもやや落ち着きを見せた一年生の四月半ば、部活主催のキャンパスツアーに参加したのである。

僕は当時のことをそれほど覚えていないが、当時上京したばかりの少年の心境を推測することは容易だろう。四月というはまだ少し肌寒い。芝からは未だに枯れ草色が抜けず、樹はやつと若緑の平たい葉を付け始めていた頃合だった。空はからからと晴れ渡り、薄い雲が心もち謙虚に漂っている。なんともワクワクするような一日ではなからうか。ベルリン棟のてっぺんでその青と若緑と白の見事な和合を目にしたとき、少年の中にあった「都会の大学」に対するバイアスは大きく変わったのである。「相模原キャンパスには一種の田舎時間が流れている！」と。それは余裕と言いつてもいい。チャペル前の芝生で弁当を広げる若者達とか、ガーデンでバスケットをする人々、ベンチで読書、そうしたことをしたくなる雰囲気相模原キャンパスにはあった。相模原に通う人々は季節によって姿を変え、少年は一年を通してそれを観察した。うらかな春の日には芝生が人でいっぱいになった。日差しが強い夏、冷房の効いた図書館が満席なのが外の小径から覗けた。秋には寂寥に染まる木陰の下で若

き文学の烈士たちが読書に耽った。相模原の記憶は、僕にとつて淵野辺の四季と強く結びついていたのだ。

二度目に訪れたのは二年目の冬だ。キャンパス移転の前の「個人お別れキャンパスツアー」であった。その日も綺麗な快晴だったが、九階から見ると冬のキャンパスはがらんどろであった。次の年からは文系がみな、ここからいなくなるのだ。僕はふと、文系が抜けたあともB棟はベルリン棟と呼ばれるのだからかと思つた。もう東西ならぬ理文対立は無くなる。何だか寂しい感じだった。そしてその時感じた寂しい感じのまま、僕は相模原を後にすることになったのだ。それが僕の、今のところの相模原の思い出である。

だから僕はこう思う。五月になつたら一度淵野辺を訪れよう。そして寒々とした相模原ではない、一番瑞々しい時のキャンパスを、僕の相模原キャンパスでの最後の思い出としようか。

# 青山キャンパスの歴史

1C 高見 勇樹

青山キャンパスの歴史は長い。過去を遡れば、明治中期、ジョン・F・ガウチャーの莫大な寄付により、伊予西条藩松平家上屋敷跡地、つまり現在の青山キャンパス

の土地が購入されたことから始まる。その歴史に裏付けられた数々の欧風建築は荘厳であり、かつ優美。中でも間島記念館とペリーホールは国の登録有形文化財にも登録されている。また、正門から続く銀杏並木も美しく、その道はこれから続く華やかな大学生活を思い起こさせる。だが何より私が驚いたのは、その人の多

系学部之都心回帰である。今年の四月より、理工学部と社会情報学部を除く文系七学部の一・二年生が相模原キャンパスから青山キャンパスへと移転したのである。つまり、七千人にも及ぶ学生が青山キャンパスへと集まってきたということになるのだ。目に見えて活気を感じるのも、当然のことといえよう。

ランチで食事したことも、銀杏並木の道を通り、多くの学生たちと共に帰ったことも——今の時点では精々半年近く過ごしてきた中で過去の出来事であって、思い出さずにはあまりにも身近で、安っぽい出来事なのかもしれない。だがそれらの出来事はやがて卒業する時、またその後の人生の中でも、鮮やかな思い出として残ることになるだろう。

私たちの過ごすことになる青山キャンパスはこれからもその長い歴史を刻み続けることになる。私たちは、私たちの過ごす青山キャンパスで大学生活を謳歌することになる。そして、数々の思い出を自分の中にたくわえていくことになるだろう。



■青山キャンパス、冬の銀杏並木

さは、その人の多さ。キャンパス内は常に多くの学生に満ち満ちており、その熱気と活気は他を圧倒するものがあった。これから私はこの場所で大学生活を送るのだと——期待と、そして不安とに充足した感情を覚えている。

青山キャンパスが学生たちによって満ち溢れるようになった原因、それは文

だがこれに関しては批判の声もなくてはならない。まず昼食時に、学生食堂が多くの人で溢れかえり、そこでの食事が難しくなったこと、またパソコンルームの使用も人々が集まることで難しくなったこと、さらに静かで落ち着いていたキャンパス内の雰囲気ガラリと変わってしまったという意見もある。実際、先輩方の中にはこの変化には戸惑っている人も少なくない。

だが、これまでの青山キャンパスを知らない私たち一年生にとっては、やはり今の活気溢れる姿こそが青山キャンパスなのだ。並木道が多数のサークルの勧誘によって埋め尽くされ、咽返るような熱気に圧倒されたことも、友人たちと一緒に急いで学生食堂に向かったことも、席が取れず、結局はベ

# 学生による小レポート

## 今に生きる地名

（風土記にみる土地へのまなざし）

2B 今井 悠有

二〇一三年は、風土記撰進の詔（和銅六年）から一三〇〇周年である。だが、二〇一二年に一三〇〇年を迎えた古事記ほどには、世間の注目を集めていないようだ。古事記や日本書紀と風土記との違いは、前者が中央（天皇）の歴史であるのに対し、後者は地方の歴史というところにある。地域を見直すこの時代にこそ、風土記は注目されるべきではないだろうか。

和銅六年に発布された風土記撰進の詔は以下の通りである。

- 一、地名に好字を付けること。
  - 二、土地の肥沃状態を記すこと。
  - 三、土地の産物を記すこと。
  - 四、山川原野の各号の由来を記すこと。
  - 五、古老の相伝する旧聞異事を記すこと。
- つまり、各地の土地の状態や地名起源を集めた書物である。これ

だけ聞けば、とても堅い文章を思い浮かべる向きも多いだろう。しかし、この地名起源譚が、無理やり名前を付けた感じがあって面白いのである。

・阿豆（あつ）の村 伊和の大神が巡行になった時、「わが胸の中が熱（あつ）い」とおっしゃって、衣の紐を引きちぎられた。だから阿豆と名づけた。（播磨国・揖保郡）

・御方（みかた）の里 御方と名づけたわけは、葦原の志許乎の命が、天の日槍の命と、黒土の志尔嵩においてになって、それぞれが、黒葛三本を足に付けてお投げになった。その時、葦原の志許乎の命の黒葛は、一本は但馬の気多の郡に落ち、一本は夜夫の郡に落ち、一本はこの村に落ちた。だから三條（みかた）という。

（播磨国・宍粟郡）  
他にも国を引き終わって「おう」と言ったから「意宇（おう）」だということ（出雲国・意宇郡）もあり、こじつけもいいところである。

また、登場する神々は、とても人間臭く親しみやすい。

・粒丘 粒丘と名づけたわけは以下の通りである。天の日槍の命が、韓の国から渡って来て、宇頭の川辺に到着して宿所を葦原の志拳乎の命に頼んでいうことには、「お前はこの地の長だ。おれは自分が宿るところを欲しいと思っておる」といった。志拳乎は、そこで海中を住居として許した。その時、天の日槍の命は、剣で海水をかきまわして海中にできた島に宿った。主の葦原の志拳乎の命は、そこで天の日槍の命の霊力の盛んな行為におそれをなして、先に国を

自分の物にしておこうと思いい、巡行し北上して粒丘に到着してご飯を食べられた。その折、口から飯粒が落ちた。だから粒丘と名づけたのである。（播磨国・揖保郡）  
・佐世の郷 土地の古老が語り伝えて言ったことには、須佐能袁の命が、佐世の木の葉を髪飾りとして挿して踊られた時に、挿しておら

れた佐世の葉が地面に落ちた。だから、佐世という。（出雲国・大原郡）

このように、慌ててご飯を食べていてご飯粒を落としてしまう神や、木の葉を髪に飾って踊る神、トイレを我慢する神までいる（播磨国・神前郡聖岡の里）のだ。

その当時、人間にとって神はどんな存在だったのだろうか。おそらく、とても身近な存在だったのではないだろうか。身近な存在だからこそ、人々は自らの住む土地やあらゆる景色に、神と神々の残した痕跡を見出せた。つまり、人間と神とが、地名を通じて繋がっていたのである。一神教の世界では絶対に考えられないことである。

当時、風土記は全国から集められたはずだが、現在ではほとんどが失われている。残っているのは播磨・出雲・豊後・肥前・常陸の五風土記、あとは逸文として部分的にあるのみで、逸文すら残っていない国も多数ある。風土記は当時の人々の土地へのまなざしを記した書であり、地域再発見の気運が高まる今、それが見られないのはとても残念なことだ。しかし、「自分の住んでいるところは、ど

んな神がいて(またはやって来て)何をした土地なんだろう」と想像を働かせてみるのも面白いかもしれない。地名は人間と神とだけではなく、神々の生きる古と当時の人々の「今」と、更には私たちの生きる「今」をも繋げてくれる。

風土記撰進の詔から一三〇〇年のこの節目に、自分の土地を見つめなおしてみようだろうか。

(現代語訳は新編日本古典文学全集『風土記』(小学館)より)

## 山上憶良「貧窮問答歌」の 貧士とソンビせん司

3 D 黄 智彦

日本へ留学して日本文学を学びながら、母国の文学や文化と比較するようになりまし。類似点・相違点を見つけて考えることは、文学を学ぶ楽しさの一つです。万葉集の「貧窮問答歌」に出てくる貧士の姿から、私は韓国の士大夫像であるソンビの姿を自然に思い浮かべました。ソンビせん司は、漢字の「士」で

表し、学識が高く優れた人格の持ち主のことを言います。三国時代から儒教の理念が徐々に広がり、その理念を実現しようとした身分を指します。ソンビせん司は官職を目的とせず、人として守るべき条理である「道(道義・道徳)」の実行を目指します。そして、社会で「道」を実践し、民が安定な生活ができるように気を配ります。ソンビせん司は衣服や飲食にこだわらず、生活が貧しくなっても恥ずかしいと思いません。富や官職よりも道義や正義を重視し、それを守るためには命を捨てることも厭いませんでした。「一定の生業がなくとも志が変わらない人には、士しかない」という孟子(Mencius, BC372? ~ BC289?)の名言のように、ソンビせん司はどんな環境でも強い意志と逞しい姿を見せなければならぬ存在でした。ところが、「貧窮問答歌」の前半に登場する貧士は、私が想像した姿とは異なり驚きました。彼は、鼻汁をずるずるとすすりながら、「寒い」と口に出して言います。貧困な環境であるのに、自分以外に学問と道徳のある人間はいない、と自慢までします。可哀想に感じ

ながらも、その姿が滑稽で笑いが出ます。「貧窮問答歌」の講義で、彼は山上憶良の自身の姿でもあると学び、私は再び驚きました。憶良ほどの身分の人、つまり官僚ならば堂々としていて、弱々しい姿は見せたがらないと思っただけです。しかし、彼は自分の弱い面も隠さず歌に表現しました。

人間なら寒いときは寒いと口に出して言うのが当然であり、それが人間の本性です。憶良は、貧士だからと言って人間の本性を無理やり隠す必要はないと思っただけではないでしょうか。強がるより弱い姿をそのまま見せた方が人間らしくて良いと憶良は考えたのでしょうか。また、民を思う貧士の心が見えることも、この歌の特徴です。彼は自分より貧しい人たちが、飢えと寒さに苦しんでいることを心配しています。その心情は、庶民のことに気を配る、貧士の道理の一つです。寒さに負ける外面とは対照的に、彼の内面は貧士らしい姿なのです。このように、憶良は貧士らしくない人を通して、虚飾を批判し、人間本来の姿を明らかにしました。「貧窮問答歌」の貧士はソンビせん司に比べると、逞しくて強い姿で

はありません。「貧窮問答歌」はそれまでに黙過されてきた貧士の人間らしい姿をユーモアを交えて描き、新しい士大夫像を示した作品であると考えられます。

## 尊敬の接頭辞「御」の 読みについて

2 D 鵜飼 薫子

中古文学において、名詞につく尊敬の接頭辞は「御」と表記される。しかしこの「御」には、「おほん・おん・お・み・ご・ぎよ」の読み方があり、仮名書きしてあれば問題はないが、漢字の場合はどう読むか確定できない場合が多い。たとえば、『源氏物語』の桐壺巻に次のような一文がある。

いつしかと心もとながらせ給ひて、急ぎ参らせ御覧するに、めづらかなる児の御かたちなり。この「御かたち」を、『湖月抄』では「みかたち」と読み、尾州家河内本では「おほむかたち」と読んでいる。この「御」という読

みについては、古くから少なからず苦労していたことがこの資料によって明らかである。それでは結局、「御」はどのように読めばよいのだろうか。

そこで、中古文学や手紙文などから「御」の読み方の規準を推定してきた結果、「御」の読み方には、ある程度の使い分けがあることがわかった。

まず「おほん・おん・お」という読み方は、「御」の下に続く語が和語であった場合に用いられる。現在の研究では、『源氏物語』や『枕草子』など中古文学では「おん」よりも「おほん」の形の方が一般的であったと言え、例えば「御身（おほんみ）」「御許（おほんもと）」「御時（おほんとき）」など多用されている。また「お」は平安時代では、「お前（おまへ）」「お座（おまし）」「お許（おもと）」「お物（おも）」などの限られた語について。

そこで「おほん・おん・お」の歴史的順序であるが、結論から言えば「おほん・おん・お」の順であると考えられる。それは中古文学において「おほん」が頻出していたのに対し、現代では「おほん」と読む語がないということから想像できるだろう。またこの「おほ

ん」を平安朝以降「おおん」と発音していたと考えれば、「おおん」から「おん」に変化することは音韻の点から明らかである。

そして「お」と「おん」の順序であるが、平安朝や鎌倉時代の「お」は尊敬の接頭辞としての役割がなくなっていたが、室町時代初期から謙讓表現（おもてなし）や丁寧表現（おあし、おやど）として、現代と同じように使用されていくようになった。対して「おん」は平安朝から尊敬、謙讓、丁寧、どれにおいても使用されてきたことにおいて「おん」は「お」よりも古くから存在していたと判断できるのではないだろうか。

次に「み」は本来靈威あるものに対する畏敬を表していた。例えば「御輿（みこし）」「御神（みかみ）」「御法（みのり）」「御仏（みほとけ）」など神仏に関する語に接続するところが基本であり、現在使われている「神酒」という語も本来は「御酒（みき）」と表記していた。しかし徐々にその接続は多様化していき、平安朝では神仏に関する語に加えて、宮廷・殿舎、調度、貴人の状態・行為に関する語にも接続するようになった。例えば帝の言葉

を意味する「御詔（みことのり）」や、調度などの「御簾（みす）」、「御帳（みちょう）」、「貴人の状態を表す「御心（みこころ）」などが見られる。

また先述した「御かたち」のよいうに、「おほん」と「み」の両方の読みができる場合、一般的に「おほん」が地の文で、「み」が会話文で使われる傾向がある。

この「み」は『古今和歌集』仮名序のほか、『源氏物語』や『更級日記』でも、多く用いられる。しかし中世に移るとその読みは少なくなることから、「み」は「おほん・おん・お」と比較し、最も古い和語の接頭辞であると言ってもよいのではないだろうか。

最後に「ご・ぎよ」は、「御」の後ろに続く言葉が漢語である場合に使われる。例えば「御膳（ごぜん）」「御殿（ごてん）」など「ご」が帝と関係ない語句にも使われるのに対し、「ぎよ」は「御意（ぎよい）」「御製（ぎよせい）」など帝に関係が深い語句に使われている場合が圧倒的に多い。

以上のことから中古文学における接頭辞「御」は、和語が下に続く場合は「おほん」と読むのが一般的であり、時が経つにつれて「おん・

お」に変化していったのではないかと考えられる。そして、神仏に關した語や特定の慣用語を伴う場合は「み」と読み、漢語が下に続く場合は「ご・ぎよ」と読んでいたようである。先述の「御かたち」は、和語が下に続くという点や中古文学では一般的な語彙であるという点から「おほんかたち」と読むことは誤りではないし、貴人の状態を表す慣用語である点や平安朝以前から多用されていたという点から「みかたち」と読んでも構わない。

接頭辞「御」は、中古文学ではある程度の使い分けがあるとは言え、一概にこの読みであると断定することはできない。したがって初めての文章において「御」を完璧に読み分けるといえるのは非常に難しいが、その難しさこそ中古文学の読解における一つの魅力なのではないかと思う。

〈参考文献〉吉野政治『古代の基礎的認識語と敬語の研究』和泉書院、望月郁子『源氏物語における敬称の接頭辞ミについて』岩波書店、木之下正雄『平安女流文学のことば』至文堂、辻村敏樹『敬語の史的研究』東京堂、『日本国語大辞典』小学館



平安時代の風習・服装・食べ物などについても知ることができます。

## 津島知明先生

3 D 榊原アンナ

津島ゼミでは、『枕草子』を題材に演習を進めています。発表は一人に約一章段が割り振られますが、作品に満遍なく触れられるよう、類聚・随想・日記回想段と、各人様々な章段を担当します。

また、発表する際には「聞く人に配慮した発表」が望まれます。自己の主張をいかに相手へわかりやすく伝達するかを模索しつつ、ゼミ生ごとに個性豊かな発表手法が見られるのも、このゼミの特徴です。

## 《中世》

### 廣木一人先生

3 B 権政貞

廣木ゼミでは『新古今和歌集』を中心に和歌について研究を行っています。前期には先生から指定された和歌について調べ、発表を行い、後期では『新古今』の中から自分が興味を持った歌を選んで

発表を行います。ゼミに入るまで

自分にとって和歌は未知なる文芸でしたが、今はその魅力をたくさん感じていきます。どなたでも和歌の魅了を感じる事が出来ると思うので是非受講してみてください。

### 佐伯眞一先生

3 A 石崎 由也

平家ゼミ。私達は佐伯先生の下で前期は章段を、後期は自分で決めたテーマを中心に『平家物語』を調べ、発表します。質疑応答、先生の批評。手厳しいです。『平家物語』は諸本や先行研究が多く、大変ですが、得る物は大きいです。また、私達の特徴は仲の良さでしょう。先生も共に行事や旅行を計画します。それができるのは、偏に先生のお人柄です。おかげで楽しく古人の心理を学んでいます。

### 佐藤智広先生

3 D 影浦 由佳

この授業では、随筆文学『徒然草』を取り扱っています。まずは講義で基礎を抑え、それから各自で好きな章段を選び研究・発表し

ます。

今まで中世文学に全く触れたことがなくても大丈夫！『徒然草』を読解するにあたっての基本語彙から作品研究の方法まで佐藤先生が懇切丁寧に指導してくださいませ。質問しやすい少人数クラスでのんびりと、しかし着実に力をつけたい方におすすめです！。

### 平藤 幸先生

2 A 鳥山美生奈

平藤ゼミでは『平家物語』を読み、登場人物や章段、又は『平家物語』に限らず軍記文学全体に関することなどからテーマを各自決め、授業で発表します。先生の解説は私たちの興味を一段と掻き立て、分からないことはしっかりとサポートして下さるので、安心して研究を進めることができます。自分の「知」、そして「文学」を深められる貴重な場となっています。

## 《近世》

### 篠原 進先生

3 C 榎本 郁  
3 C 正木 恵理

篠原先生のゼミでは、井原西鶴の〈ふしぎ〉について研究します。様々な顔を持つ西鶴には多くの謎が遺されており、私たちはミステリー・ハンターのような気持ちでその謎に迫っています。毎回の講義で担当者が発表し、その後全員で自由に議論を行い、考えを深めていきます。謎に包まれた西鶴の〈ふしぎ〉な世界を、優しく丁寧にみませんか。

### 藤川雅恵先生

2 C 三留 千央

このゼミでは『御伽百物語』という怪談を読んでいます。前期は信心深い人が童宮に行く話（『御伽百物語巻之一』）を読み、出てきた地名を古地図で調べたり、実際の事件との関わりを調べ、他の童宮に関する他の作品との比較を行いました。テキストはくずし字ですが、プリント等を用い

て初歩から丁寧に教えていただけ  
るのではじめてくずし字に触れる  
人でも安心して受講できます。

## 井上泰至先生

3D 服部 瑤子

上田秋成の『雨月物語』を深く  
読み進めていくのが井上ゼミです。  
多くの人が『雨月物語』を「怪談」  
として認知していると思いますが、  
怖いだけが『雨月物語』ではない  
という新たな視点を知ることがで  
きます。

井上先生は私たちの考えはお見  
通しなので、鋭い指摘や詳しい解  
説で議論を盛り上げてくださいま  
す。秋成の残した裏のメッセー  
ジを知りたい人はぜひ井上ゼミに！

## 山名順子先生

3A 桂 萌子

私達のゼミでは黄表紙を扱って  
います。一人につき一つの場面が  
割り当てられ、それぞれの場面に  
本文の翻刻や語釈、絵の注釈など  
をつけていきます。

今取り扱っている山東京伝の  
『御存商売物』に登場するのは皆

「本」が擬人化した人物。江戸の  
出版界や風俗・文化・洒落などの  
流行り廃りを学ぶことができます。  
知っているようで意外と知らない、  
江戸のユーモアを感じてみませ  
んか。

## 片山宏行先生

3C 市川 芳乃

レクトゥール（受動的な読み  
手）からリズム（能動的な精読  
者）へ。これが私たちの目標とす  
る文学作品への姿勢です。リズム  
となるために、このゼミでは作  
品を読んで点数づけを行い、それ  
によってテーマなどを分析する力  
を身につけていきます。また、先  
行研究や映画を見て再度分析を行  
うこともします。ただ読んでおも  
しろかったですら終わらない、論  
理的な「読み」を目指しています。

## 日置俊次先生

2A 大嶋みつぎ

私たちはこの日置ゼミで迷子に  
なります。井伏鱒二の「山椒魚」  
や宮沢賢治の「やまなし」、太宰

治の「走れメロス」などの近代の  
短編小説を読むのですが、日置先  
生は質問を出して私たちを迷わせ  
ます。「答」は人の数だけ存在し  
ます。大切なのは「迷う」という  
こと、そして自分なりのルートで  
出口に辿り着くことです。近代の  
短編小説の世界で、皆さんも一緒  
に迷子になってみませんか。

3A 青木 萌子

日置ゼミでは、お題にそって  
自分たちで短歌をつくり批評し  
合う「歌会」をします。大学の周  
辺の文学散策に出かけたりしま  
す。批評といっても、この授業に  
は「正解」もなければ「間違い」  
もありません。自分たちの作った  
歌、一首一首が大切な財産となっ  
ていきます。皆さんもこのゼミで  
五・七・五・七・七の三十一音に自分  
の想いをのせ、私たちと一緒に全  
世界に発信してみませんか。

## 佐藤 泉先生

3A 永井真理子

この演習では大正末から昭和初  
期の文学論争を研究しています。

毎週担当者が各時代の評論に関す  
る発表を行い、「文学」を作品か  
らではなく思想という視点から考  
えていく時間を持っています。私  
はこの演習に入るまで「文学論争」  
に目を向けたことがありませんで  
したが、時代ごとに人々がどのよ  
うな思いで文学を捉えていたのか  
を知ることが作品研究にも大いに  
役立っています。

## 市川浩昭先生

2B 根間 才弥

市川先生の演習では島崎藤村の  
『破戒』について研究します。ひ  
とひとり考察をまとめて発表し、  
先生や学生が質問するという形で  
授業は進んでいきます。先生の見  
解と知識は非常に参考になり、毎  
回新しく視界が拓けるような思い  
です。厳しいことをおっしゃって  
も授業後にはフォローすることも  
忘れない先生の優しさや、作品自  
体の面白さが励みになって、難し  
くも非常に楽しい授業です。

## 山口政幸先生

3C 土橋 加苗

山口ゼミでは、前期は村上春樹『1Q84』後期は松本清張『砂の器』を読み、それぞれ自分たちのテーマを見つけ、発表します。「どこに対して疑問をもったのか」「何を深くつきつめたいのか」を考えて設定したテーマは、皆の個性が出るので自分では気づかなかった新たな見方を学べ、より理解が深まります。自由な雰囲気でありつつ、真剣に作品と向き合えるゼミです。

## 李満紅先生

2B 土肥 真純

李先生のゼミでは、中国知識人の逸話集『世説新語』を扱います。授業では、多くの逸話の中からいくつかの話を読み解くほか、学生自らが資料を作成しての発表も行います。李先生は丁寧にご教授くださいますし、中国の文化や習慣も紹介してくださいます。当時の時代背景や人々の生活の様子、登場人物の性格等を考察しながら

意見を交わすこの授業は、一回一回がとても有意義で魅力的です。

## 樋口泰裕先生

匿名希望

遷居之夕聞鄰舍兒誦書、欣然而作。幽居亂蛙聒、生理半人禽。登然已可喜、況聞絃誦音。兒聲自圓美、誰家兩青衿。且欣集齊嘖、未敢笑越吟。九齡起韶石、姜子家日南。吾道無南北、安知不生今。海闊尚掛斗、天高欲橫參。荊棘短牆缺、燈火破屋深。引書與相和、置酒仍獨斟。可以侑我醉、聊然如玉琴。

## 北島大悟先生

3A 佐藤 令奈

このゼミは、漢文学が苦手な方にでも易しい漢文学入門コースです。前期では、中国古体詩の変遷と近体詩のルールを学び、唐代の著名な詩人の詩を先生と一緒に読解していきます。後期では、割り振られた詩を自分の力で読解し、発表します。今年度は、学生数が二人だったのと、先生が素朴な疑問でも考えてくれる方だったのもあり、参加型の授業がとともため

になりました。

## 山崎 藍先生

3A 初海 正明

訓読者翻訳也、是臨學漢文而不可忘矣。於此演習所披文章者『任氏伝』『広異記』等「唐代伝奇」、其名遍見知怪異之名著矣。学生備解白文、為侃譎談論。「学而不思則罔、思而不学則殆」、然而隨其所解而議論、欲近「唐代伝奇」之真意。爾若味読「唐代伝奇」、則為何如付度。

## 鈴木崇義先生

3A 初海 正明

この演習では『史記』を扱う。『史記』と言えば司馬遷、紀伝体、有史以来の歴史を纏め上げたものという知識はあるが、しかし先生のご指導の下、実際に白文を精読するとそこに知り得なかつた意外な司馬遷の懐疑の歴史観が浮かび上がってくる。『史記』は日本にも大きな影響を及ぼしており、年間漢文を修めることは漢文のみならず古文を研究する者にも必ずや有益なものとなるだろう。

## 《日本語学》

## 近藤泰弘先生

3D 石原将太郎

この授業では日本語に関する様々なことを、パソコンを使って研究していきます。基本的に演習形式なのでそれぞれが自由に、自分の好きな事を好きな様に研究、発表する事が出来ます。また、前期にはブレンス・ストーミングやビデオバトルなど、ユニークな方法で研究やプレゼンの練習をすることで、一年を通して授業に参加することで様々な能力を身に付けることが出来ます。

## 澤田 淳先生

2B 配島 大輝

私達の母国語である日本語、使っていないながらも考えたり勉強したりする機会は少ないものです。この演習は日本語学の論文を読み、各回で担当者がレジュメを作成し発表、それを基に皆で意見を交換します。指示詞コ・ソ・アの使い分け、推量の「だろう」「らしい」の使い分け等、感覚で使っている日本

語を文法的、意味的に考察し理解を深めていきます。日本語の奥深さを知ることができる演習です。

\*

### 3 D 藤田 彩花

日本語の日常に潜む文法現象の法則や発展経過などを、論文を読みながら、少人数で討論していきます。主な題材は「あげる」「もらう」のような授受表現についてや、副詞「なんか」の使われ方についてなど普段の生活でサラサラ飛び出す言葉なので、とっかかりやすさがあります。留学生の人も参加しているのです、他の言語との比較を通して、日本語というものを見つめ直せます。

\*

## 金愛蘭先生

### 2 B 辺見奈緒美

日本語は生きている。この演習では、常にそんな感覚を持って日本語と向き合っている。日本語は時代を経て意味が変わったり、消えたり、生まれたりする。そのため、研究対象は方言、外来語から若者言葉や略語、役割語に至るまで広く、グループワークを中心に

様々な日本語表現の昔、今、未来を考える。普段と違った視点で日本語を眺めれば、新鮮な日本語の豊かさや面白さに出会えるだろう。

\*

### 《日本語教育》

## 山下喜代先生

### 4 B 加藤 遼

山下ゼミでは日本語教育を理論と実践を通し、学習者と教師の双方の目線から学ぶことができます。前期は、様々な論文から、論文作成と日本語教育の手法や批判的視点で読むことを学びます。後期は、班ごとに留学生の日本語クラスを仮定し、授業案を作成、何が双方に必要なかを追究していきます。これらを踏まえ、四年次に実習を行います。ぜひ、一緒に日本語を世界に広める一人になりましょう。

\*

## 川端芳子先生

### 3 C 山本 隆弘

日本語を母国語としない人に日本語を教える講師としての模擬授業や研究発表を行う。各自が指導案の単元ごとに担当箇所を決め、研究結果を発表して進めていく。

私たち日本人は普段何気なく日本語を使っているため、その法則に気づいていないことも多い。日本語講師はそれを理解し、説明できる力が求められる。日本語を母国語としていても、自国の言語を見つめ直せる演習となっている。



# 講師・・笠嶋忠幸先生(出光美術館学芸課長代理)

## 講義題目・・古写本における「書」の魅力

### 3D 宇賀神咲紀

今年度の日本文学特講Aでは、出光美術館学芸員の笠嶋忠幸先生をお迎えし、「美術的観点から『書』の魅力を探る」ことについて学びました。

私たち日本文学の学生は、文学的研究資料としての書に接する機会が数多くあります。しかし私たちが着目するのはそこに書かれている内容ばかりで、書の造形表現としての魅力について深く考察することはほとんどないと思います。書は、「文学的内容」「文化史」「造形表現」というような様々な観点から研究することが可能ですが、今回は「文化史」「造形表現」に着目し、専門的な理解を深めていきました。講義はプロジェクトで投影された画像の鑑賞を中心に、平安時代から中世、桃山期、

近世、そして近現代に至るまでの作品を時代順に追っていき、各時代の名筆の魅力を探りました。

平安時代の書の鑑賞においては、「和様の独自性とは何か?」というのが大きなテーマでした。「日本の書表現に独自性はあるか?それとも単なる中国の模倣なのか?」ということについて、日本の書と中国(唐)の書を比較しながら考えていきました。プロジェクトで次々と作品が映し出され、わたしたちは数多くの作品に接しながら作品ごとの違いを探り、その芸術的価値について考察していきます。初めのうちはどのような点に着目すれば良いのか分からず戸惑うこともありましたが、笠嶋先生の解説と共に多くの作品を鑑賞していく過程で、だんだんとその作品の特徴や魅力を発見できるようになっていきました。

# 日本文学特講A

## (夏期集中講義)

文字の配列、連綿、行間、空間、フォーマット、文字の重心の取り方、ずれやゆらぎ、あそびの有無、といった鑑賞のためのポイントが自分の中にインプットされていくことにより、作品ごとの造形の特徴を自然とつかめるようになっていくことを実感できました。本講義では、変体仮名の学び方についても講義をしていただきました。笠嶋先生は、「変体仮名辞典の代表的な事例を一対一対応で暗記する」という学習方法が間違っていることを繰り返しおっしゃっていました。変体仮名を学ぶためにはまず、仮名のもととなっている漢字の旧字体を知るところから始め、そこからどのような変化をして仮名になったのか、自分の頭で想像しながら文字を自力で変化させていくというトレーニングが必要不可欠であることを学びました。「漢字から変体仮名が生まれる過程には一見ルールがないように思われがちであるが、変体仮名は明確なルールに基づいて構成されている」というのも目から鱗でした。

いは、作者の仕掛け、つまり製作用意図の有無ということを学びました。造形表現としての書を鑑賞するとき、わたしたち鑑賞者は、作品を見つめ、読み解き、作者の思想を発見しなければなりません。そこで美術的観点の造形理論を引用し、表現にどのような工夫がなされているかということについて具体的な論証を行っていただきました。また、造形美術には必ずモデルがあり、そのモデルを発見することが造形美術研究に欠かせない作業であるということも学びました。モデルとなっている作品からヒントを貰いつつ、自分なりの個性、アレンジ(アイデンティティ、アイデア)を加えているのが近現代の書表現の特徴であるということとを、実際の作品の鑑賞を通して知りました。

夏期の特別講義は、四日間です。十五回の授業を集中して受講できるといのが最大のメリットです。理論のインプットと実践的な鑑賞を短時間のうちに何度も繰り返すというのは、芸術作品研究の観点を身につける上で大変効果的な方法であると思います。書と芸術の世界にどっぷりと浸かった四日間には非常に快く、有意義で、充実したものでした。

# 日本文学特講B

(夏期集中講義)

講師・・岩崎雅彦先生 (国学院大学非常勤講師)

講義題目・・能と狂言

3C 仲村 レナ

今年度の日本文学特講Bは、国学院大学の非常勤講師でいらつしやる岩崎雅彦先生をお迎えして、日本の古い演劇である能と狂言について学びました。各講義とも映像資料を用いてくださり、多くの能や狂言に触れることができる機会となりました。

まず初めに能と狂言について、それぞれの特徴や歴史を中心に学びました。能の登場人物は公家や武士が主であり、象徴的な演劇であるのに対し、狂言は庶民が登場する写実的な演劇です。また、狂言は台詞に重点が置かれており、笑いの要素がある一方で、能には笑いの要素はなく、歌と舞に重点が置かれているということに、能と狂言の違いがあります。

次に、能の隆盛に貢献した、観阿弥と世阿弥について触れました。観阿弥は、能の座である結崎座から独立して観世座を創立し、世阿弥と共に足利義満將軍の御前で能を演じました。また世阿弥は、連歌の大成者である関白一条良基にその実力を絶賛され、能は価値の高い芸術として重んじられました。その後世阿弥は、十八年の年月をかけて、初の能芸論を記した、七巻から成る『風姿花伝』を執筆しました。

講義では、能の本質を詳説したその『風姿花伝』を読み進めました。中でも印象深かった事柄は、次の二つでした。

一つ目は、『風姿花伝』の主題である「花」についてです。「花」とは芸の魅力のことを指しています。世阿弥によれば、花は四季折々

に異なる種類のものが咲くからこそそこに珍しさがあり、その新鮮さが人々の心に面白いという感情を生みます。能も花と同様に、演技の中に珍しさがあればこそ、鑑賞する人々は面白さを実感するものであると説いています。

二つ目は、演技における物まねについてです。例えば老人の演技は、ただ老いた人間を演じるのではなく、その老いの中に「花」を感じさせられる演技をしなければならぬと述べています。また、鬼の演技については、強い・恐ろしいという鬼のイメージと面白いという感情は正反対のものであるが故に、鬼に似せて演じれば演じるほど、面白さから遠のいてしまう難しい物まねであると説明しています。

講義の中では、代表的な能と狂言の映像資料を視聴しました。例えば「土蜘蛛」という能は、病に臥している源頼光のもとに訪れた、法師に扮した土蜘蛛が、頼光の家人たちによって退治されるという内容です。土蜘蛛が繰り出す、和紙で作られた糸が舞台上華やかさを演出しており、非常に印象的でした。また、「鐘の音」という狂言は、鎌倉に行つて「金の値」を聞

いてくるよう主に言われた太郎冠者が、「鐘の音」と勘違いし、聞いてきた寺社の梵鐘の音の違いを直の前で再現してみせるという内容です。そこには、時代を経ても人々の心を躍らせる面白可笑しさの存在を確認することができました。

能には、一般的に馴染みがなく敷居の高い芸術というイメージがあるかもしれませんが、しかしこの講義を通して私は、『更級日記』や『平家物語』などについての知識と、講義における学習内容が結びつくことを思いがけず経験しました。このことによって、相互の理解を深めることが出来ただけでなく、学ぶことの面白さと重要性を強く実感することができました。人間の感性に訴えかける能や狂言を鑑賞することで、私たちは人間性を豊かに養うことが出来るのではないのでしょうか。まして、実際に舞台に赴いて能を鑑賞することは、その場でしか味わうことの出来ない雰囲気や迫力を五感で感じることが出来る、貴重な体験であると思います。能と狂言をあらゆる面からみて、その価値を気付かせてくださった岩崎先生に、感謝の気持ちでいっぱいです。

二〇一三年度講義題目

〈大学院〉

上代文学演習(一)  
外から見た日本文学史

矢嶋 泉

上代文学研究(二)

「書物」としての萬葉集古写本

近代における古典文学・古筆研究の方法論

小川 靖彦

中古文学研究(二)

平安朝仮名散文研究

土方 洋一

中古文学演習(二)

引歌研究の諸問題

高田 祐彦

中世文学研究(一)

延慶本『平家物語』を読む

佐伯 眞一

新出資料『相模川』断簡を読む

中世文学演習(二)

『梵灯庵返答書』研究

廣木 一人

近世文学演習(一)

近世の咄本を読む

佐藤 至子

近世文学研究(二)

西鶴を読みこなす

篠原 進

近代文学演習(一)

菊池寛『話の屑籠』を読む

片山 宏行

近代文学研究(二)

横光利一研究

近代文学研究(三)

戦後の文学批評

近代文学演習(三)

谷崎潤一郎研究

韻文学研究

『奥義抄』を読む

劇学研究

能・狂言研究

日本語学研究(二)

古典語・現代語対照文法の研究

日本語学演習(二)

文法論・語用論の研究法

中国古典学研究

魏晉詩の研究

日本語教育学研究

日本語教育における語彙学習の教材研究

文学研究法

作品をよむために

日本文学研究のための基礎知識・能力

文学研究の基礎

文学テキストの扱い方

文学作品の分析方法

文学研究の基礎

文学テキストの扱い方

文学作品の分析方法

文学研究の基礎

文学テキストの扱い方

日置 俊次

佐藤 泉

山口 政幸

中村 文

岩崎 雅彦

近藤 泰弘

澤田 淳

大上 正美

山下 喜代

矢嶋 泉

廣木 一人

土方 洋一

佐伯 眞一

日本文学史

一、上代・中古文学史

二、中世文学史

三、江戸文学の透視図

四、日本・近代・文学史

古典文学概論

江戸からミステリーの系譜をたどる

近代文学概論

明治、大正、昭和の文学(主に小説)の変遷を知る

漢文学概論

中国古典における韻文と散文の展開について

日本語日本文学情報処理法

日本語・日本文学研究に必要な情報処理の基礎

日本語学概論

日本語の仕組みを学習する

日本語史

日本語史―語彙史・文法史

表象文化研究概論

戦後社会の「表象」

日本学入門

「日本学」を通じて日本の言語・

文学・文化を考察する

文学交流入門

日本文学を「文学交流」の視点から展望する

日本文化学入門

日本文学を専門的に学ぶ外国人が必要とする基本的な日本語・日本文学・日本社会についての知識を得る

古写本でよむ『萬葉集』(金沢本で読む恋歌)

『萬葉集』の美とその英訳の研究

『古事記』の神話世界

『古事記』『日本書紀』の歌研究

『枕草子』『紫式部日記』を読む

『枕草子』を読む

『古今和歌集』精読

『源氏物語』野分巻を読む

『新古今和歌集』研究

『徒然草』を読む

『平家物語』を読む

『平家物語』演習

小川 靖彦

西鶴の(へふしぎ)を考える

篠原 進

コンピュータによる文法研究

近藤 泰弘

『御伽百物語』を読む

藤川 雅恵

日本語と外国語との対照研究法

澤田 淳

『雨月物語』を読む

井上 泰至

日本文学講読

高田 祐彦

黄表紙『御存商売物』(ごぞんじのしょうばいもの)を読む

山名 順子

『源氏物語』桐壺巻を読む

佐藤 智広

近代小説の特徴と意義―『破戒』と『罪と罰』

市川 浩昭

古典で読み解く中世の鎌倉

市川 浩昭

文学思想と小説を読む

佐藤 泉

文学の近代・演劇の近代

市川 浩昭

長編小説の構造・力学を考える

山口 政幸

『論語』を読む

樋口 泰裕

『1Q84』と『砂の器』

山口 政幸

『日本語学講読』

金 愛蘭

短編小説の世界

日置 俊次

外来語の諸問題について

金 愛蘭

現代短歌の研究と実作

日置 俊次

書道の歴史と実技

渡邊 貴彦

卒業のためのステップとして

片山 宏行

書道史・指導法の知識と書道の基礎の技術修得

渡邊 貴彦

漢文学演習

李 満紅

代表的な書の「古典」作品の「臨書」

橋本 匡朗

『世説新語』を読む

李 満紅

書の基本知識を身につける

金子 馨

杜詩を読む

樋口 泰裕

『日本語教育概論』

小島 聰子

唐詩を読む

北島 大悟

『日本語教育概論』

小島 聰子

唐代伝奇を読む

山崎 藍

『日本語教育概論』

小島 聰子

『史記』を読む

鈴木 崇義

『日本語教育概論』

小島 聰子

日本語研究と語用論

澤田 淳

『日本語教育概論』

小島 聰子

身の回りの日本語の諸問題について

澤田 淳

『日本語教育概論』

小島 聰子

日本語教授法

外国人学習者に対する日本語授業

小島 聰子

特別演習(卒業論文)

『萬葉集』および書物学の方法

小川 靖彦

上代文学に関する諸問題

矢嶋 泉

平安文学、その他

土方 洋一

卒業論文作成指導

高田 祐彦

卒業論文作成指導

佐伯 眞一

中世・近世韻文学

廣木 一人

主に近世文学

篠原 進

『物語した作家』とその作品・「原作と映像」

片山 宏行

卒業論文作成指導

日置 俊次

近代以降の文化、文学、思想をテーマとする卒業論文の作成

日置 俊次

中国古典文学・漢文学

佐藤 泉

日本語学の卒業論文の書き方

大上 正美

日本語研究に関連する卒論指導

近藤 泰弘

日本語教育及び関連分野の研究

澤田 淳

日本語教育演習A

山下 喜代

日本語教育研究法及びコースデザ

山下 喜代

イン研究

山下 喜代

日本語教育演習B

日本語教育初級教材の具体的な指導方法を考える

川端 芳子

『枕草子』の文学世界

『時代』の中の『萬葉集』

小川 靖彦

長編物語としての『源氏物語』

高田 祐彦

『枕草子』の文学世界

高田 祐彦

連歌・連歌師とは何であったか

土方 洋一

日本人の「武」の自意識と文字

廣木 一人

ベストセラー研究

佐伯 眞一

「趣向の文学」としての近世戯作の魅力

篠原 進

国語教科書の戦後史

佐藤 至子

菊池寛と日本近代文学

佐藤 至子

横光利一研究―短編小説の世界―

片山 宏行

坂口安吾文学

日置 俊次

007シリーズでたどる現代社会の歴史

原 卓史

『日本文学特講(集中講義)』A

助川幸逸郎

古写本における「書」の魅力

笠嶋 忠幸

日本文学特講(集中講義) B

能と狂言 岩崎 雅彦

漢文学特講

唐代詩人の陶淵明受容の契機と

〈言志〉 大上 正美

中国の古代文学(『詩経』・『楚辞』・

漢代楽府) 牧角 悦子

日本語学特講

コーパスに基づいた日本語文法研究

近藤 泰弘

意味論・語用論研究 澤田 淳

日本語の地域的バリエーションで

ある「方言」について 三井はるみ

日本語教育実習

「短期集中日本語会話クラス」開講

山下 喜代

日本文学研究のための英語

日本文学を専攻する学生が、英語

で書かれた日本文学・文化論を

正確に理解し、自ら英語で発信

する能力を育成する 福田 武史

音声表現法

思っていることをわかりやすく、

的確に表現する方法について

文章表現法

基本的な文章技術の向上を目指す

坂本 充 木村 寛子

〈研究室だより〉

〇二〇一三年度三月の日本文学科学

部卒業生は一六五名、四月入学

生は一二二名でした。大学院前

期課程三月修了生は六名、四月

入学者は六名、後期課程の四月

入学者は一名でした。

〇二〇一三年度から新たに非常勤

講師として、井上泰至、岩崎雅

彦、笠嶋忠幸、金子馨、川木牙

子、木村寛子、金愛蘭、坂本充

佐藤至子、須永哲矢、津島知明、

土屋智行、福田武史、山名順子、

李満紅の諸先生方にご尽力いた

だいています。

〇二〇一三年度は、山下喜代教授

が学科主任を務めました。

〇二〇一三年度は大屋多詠子准教

授が内地留学(東京大学)のた

め休講なさいました。

〇二〇一三年度日本文学会大会・

講演会・総会が六月二十二日に

青山キャンパス、四号館四二〇

教室で開催されました。講演会

については本会報四頁をご覧下

さい。

〇二〇一三年四月から、副手に岩

田麻莉子さん、大庭ちづるさん

の二名が着任されました。ま

た、濱島絵美さんが退任された

ため、一〇月から後任として納

谷麻実さんが着任されました。

〇昨年度ご退任されました大上正

美先生が、今年度より非常勤講

師として週に一度青山キャンパ

スにて講義を行ってくださって

います。

(編集後記)

本年度、日本文学科を含むすべ

ての文系学部が青山キャンパスに

全面移行しました。そのような節

目の年に会報の編集に携われたこ

とを心より嬉しく思います。

本年度の会報もたくさんの方か

ら寄稿していただきました。さら

に本号は例年の項目に加えて、各

キャンパスを振り返る記事や学生

による研究発表のページを設ける

など、内容の充実化を図りました。

どれもたいへん読み応えのあるも

のに仕上がっております。

最後になりましたが、本号に携

わったすべての執筆者、編集者の

方々に、この場をお借りして厚く

御礼申し上げます。

(学生委員委員長 小幡奈月)

編集委員

教員

土方 洋一

学生二年生

小幡 奈月

石橋 迪子

今井 悠有

鵜飼 薫子

杉山真里亜

根間 才弥

石原 玲奈

國井美沙希

羽鳥 遥

三原 真美

矢嶋 泉

浅沼 建太

糸永 晴子

岩本 悠里

梅澤 朋代

堂前 清香

野間麻衣子

加古真里奈

高見 勇樹

本田 恵

山田えりか

会報 第四十八号

二〇一四年三月一九日 発行

渋谷区渋谷四一四一二五

青山学院大学総研ビル10F

日本文学科学研究室内

〒150-8366

編集 青山学院大学日本文学会

電話 (〇三)三四〇九一七九一七

FAX (〇三)三四〇九一八〇〇五